

己が影そつと押さへて翅やすめ水を吸ふかな夏蝶の舌
松本秀一

接写レンズで撮るように、思いつきりクローズアップして、小さな生き物への慈しみを表現。第二句「そつと押さへて」の、綾のある表現がポイント。

去勢された動物のごと寂しげな防音室のグラウンドピ
アノ 島田節子

本来ならば自在に広がってゆくだろう音の波を、人間の都合で遮断されてしまったピアノ。防音室をこういう見方で見た短歌をはじめて読んだ。見方の斬新さを買いたいと思う。

沙翁劇を見てほしかつたと残念がる矢代朝子に悪女の匂ひ
犬飼亮介

話題は、今年二月に下北沢・本多劇場で公演されたシエークスピアの『ペルグリーズ』。四月歌会（だったと思う）の二次会で矢代朝子としゃべった感想だろう。もちろん「悪女の匂ひ」は褒め言葉。

水面なる樹々点描の絵のやうにざざめきやまぬ四月の終り
田中薫

水面に映る若葉の照り翳りを比喻して、「点描の絵のやうに」はまことに的確、とくに揺れ、動きを表現して、うまい。

春はエラ呼吸に変える泪目の魚となりて水底にあり
佐久間得幸

花粉症の歌である。こういう花粉症のうたい方がある

短歌の現在

No.412 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

のかと、感心した。なるほど花粉症の魚はいない。水中でくれば、花粉症は心配しなくてもいい。初句から第二句にかけて句またがりになって読みにくい、まあ、苦しい感じが読めなくもない。

間藤なる終着駅より銅山へ叢の鉄路いまだ残れり
青山仁

「間藤駅」という駅は「わたらせ渓谷鐵道わたらせ渓谷線」の駅。全くの無人駅で改札口もない駅らしいが、鉄道好き仲間のあいだでは有名な駅らしい。ネットで見るとよく分かる。足尾銅山がさかんだったかつては、駅員が二十人近くいるにぎやかな駅だったという。下句はそんな往時の名残を見つけた感慨である。鉄道好きな作者ならではの一首。

マスクかけ県民同士にらみ合う警備の人のサンングラス悲し
比嘉弘子

辺野古基地移設問題で沖縄県民同士が争う現実をたんたんとうたう一連。抗議する側も警備する側も、ともにマスクとサンングラスで顔を隠している。素顔で対立するのはちがう、「悲し」としか言えない、奇妙な争いの空気を表現。

顔のない女であらう暗闇に姿が見えず語り続ける
植山俊宏

「顔のない女であらう」というのはじまり方、なかなかである。あと、どこまで種明かしをするかが勝負どころだが、以下、すれすれのところまで種明かしをしてうた